〔共同研究：大学教育における南大阪の地域文化資源の掘り起こし・保存・活用の研究〕

日本仏教揺籃の地としての南大阪（五）

――鳥取郷の方へ――

梅　山　秀　幸

一　物部について

物部氏の本拠地であった渋川の廃寺跡の発掘によって，『日本書紀』崇峻即位前紀に記された，蘇我氏・厩戸皇子の崇仏派と物部氏の廃仏派とあいだの宗教戦争，そして崇仏派の勝利と廃仏派の敗北，物部氏の衰退という，図式的な歴史の展開は（高校の教科書はまだおおむねそのように記されている），修正を加えることが余儀なくされた。物部氏も同時代者として蘇我氏らと同じように新たに入ってきた仏教を理解し，受容していたのであり，その「廃仏」は，仏教そのものを排斥，迫害するものではなく，神祇を祀ることで大和を統治すべき天皇が，その個人的な趣向から，古来の神祇とは異なる「蕃神」をあらためて礼拝しようとしたことに対する抵抗だったと，安井良三氏は説く（1）。

安井氏は，渋川廃寺が物部守屋その人によって創建された可能性にまで言及するのだが，いずれにしろ，物部守屋は武人として，まさに「もののふ」らしくみずから先頭に立ち，朴の木の上に登って矢を雨のように射て戦って，迹見首赤檮によって射落とされてしまう。一族も殺され，守屋の軍は敗北した。そして，『日本書紀』は物部守屋の「資人」である捕鳥部万（とりべのよろず）の奮戦とその飼い犬のエピソードを極めて印象的に記している。後に河内の国から分立する和泉の国が舞台となる話であり，この稿では和泉の国の最南端に蟠踞した鳥取氏に話を収斂させることになる。ともあれ，この丁未の年（587）の「宗教戦争」によって，物部守屋は死に，物部氏は敗退し，いったん歴史の表舞台からは引き下がることになる。

しかし，「物部」とはいったいどういう存在だったのか。

『日本史広事典』（山川書店）は「物部（もののべ）」の項で次のように述べる。

【物部】古代，物部連に統率され軍事・警察・刑罰に従事した部民とするのが通説。「もののふ」と読んで武人一般をさすこともある。律令時代には諸国に多数の物部姓の人々がおり，物部郷（里）も二〇に及ぶ。六世紀に滅びた物部氏の部民がこれほど多かったかは疑問で，また部民であったとしても多くはふつうの農民で，中央の物部氏とそれに従う武人た

キーワード：物部氏，鳥取氏，波汐神社，海会寺趾，自然居士

ちの経済的基盤になっていたとみるべきであろう。律令制下では刑部省の囚獄司に伴部である物部四〇人が所属して罪人の刑罰を担当し，そのもとに士丁から選ばれた物部丁二〇人が武器を帯して獄を守った。衛門府にも内の物部三〇人がおり，東市・西市には各二〇人の物部が属して非違を禁察した。

まず「部民」として「物部」がいたとする。それは後の「もののふ」の語義が示すように武人的な性格をもち，戦闘行為を当然行うことになるが，平時であっても武力行使が必要となる刑吏および警察業務に携わったことが特に取り上げられている。その「物部」を統轄する「物部氏（もののべうじ）」については，『日本史広事典』は別の項を設けて次のように述べている。

【物部氏】饒速日命を祖とする有力氏族。軍事・刑罰を担当する物部の伴造。姓ははじめ連（むらじ）。六八四年（天武一三）朝臣に改姓し，まもなく石上朝臣に改氏。本拠地は河内国渋川郡付近。複姓の同族が多く，八十物部と称された。『日本書紀』では，垂仁朝に物部十千根大連がみえるが，実際には継体天皇を擁立した麁鹿火が大連に就任した最初か。ついで麁鹿火とは別系の尾輿が大連になり，大伴金村を失脚させて勢力を誇ったが，蘇我稲目（いなめ）と対立した。次の大連守屋も蘇我馬子と争い，五八七年（用明二）に滅ぼされた。その後，壬申の乱では物部朴井連（朴井氏）雄君が活躍。天武朝に石上朝臣に改姓した麻呂は左大臣に至り，以後石上氏は八世紀～九世紀初めに多くの高官を輩出した。

「連」を姓とする「物部氏」がいて，複姓の同族も多く，「八十物部」とも称したという。『万葉集』には「物部八十伴雄（もののべのやそともを）」ということばがたしかに頻繁に出てくる。八十というのは勿論，数が多いという意味だが，実に数多くの「物部」の氏族群を饒速日命を祖とする「物部連」が統轄したということなのであろう。神代はともかくとして，垂仁朝にも物部大連が出てくるものの，物部連が大和朝廷で重きをなすのは継体天皇の麁鹿火以後のことであり，蘇我氏との抗争に敗れ，後に石川氏に改姓したことを，『日本史広事典』では簡単に述べていることになる。さらに詳しい物部についての諸家の見解については必要に応じて触れることにしたい。

物部氏については，江戸時代以降は偽書扱いされる『先代旧事本紀』にことさらに詳しく，注目すべき記載があるのだが，まず『日本書紀』にどう記されているのかを把握しておこう。

二　饒速日尊の天降り

神武天皇即位前紀によると，まだ九州にいた神日本磐余彦（神武）に，塩土老翁が，

「東の方に美き地有り。青山四周れり。其の中に亦，天磐船に乗りて飛び降る者有り」

と告げたという。ここから東方に，美しい土地がある。そこは四方をぐるりと緑の山に囲

まれている。そこにはすでにわれわれより先に天孫族が船に乗って降臨している，というのである。そこで，イハレヒコは考える。

「彼の地は，必ず以て大業を恢弘べて，天下に光宅るに足りぬべし。蓋し六合の中心か。厥の飛び降るといふ者は，是饒速日と謂ふか。何ぞ就きて都つくらざらむ」

天孫族というのは，おそらくは朝鮮半島からの渡来人と認識していいのであろう。稲作と金属器とそして新しい土器とをともなって，何波にもわたって渡来したのであったろうが，カムヤマトイハレヒコたちより早くすでに近畿地方に入って居住している人びとがいる。おそらく話には聞いているニギハヤヒの一族なのであろう。われわれは曽祖父のホノニニギノミコトが高千穂の峯に天降って以来，三代ものあいだのんびりと構えて南九州で過ごしてしまって，先を越されてしまったが，どうしてわれわれもそこに行って都を造らないでいようか，ということになる。文意は直截的で，東征の決意である。そして，その年の十月には兄弟たちと船団を組んで出発する。まずは筑紫の宇佐，そこでは宇佐津彦と宇佐津媛の饗応を受け，一族の一人を宇佐津媛と結婚させる。征服には戦闘がともなったにちがいないが，むしろ相手の服従の意を表現する饗応と女性との結婚とでしばしば語られる。そして十一月には筑紫の岡，十二月には安芸の埃宮，翌年の乙卯の年の三月には吉備の高嶋。そこで三年のあいだ船を修造し，軍糧を蓄え，一気に天下を平定しようと決意する。戊午の年の二月に船団は浪速に至り，三月には当時はおそらくは洲潟のようだった大阪湾を奥に縫うように入って行き，河内の草香の白肩の津に至った。四月にはそこから陸を竜田に向かい，一気に生駒を越えて中洲（大和）に攻め込もうとしたのが，長髄彦に迎撃されて，兄の五瀬命が致命傷を負い，撤退を余儀なくされる。そうして，太陽神の子孫である自分たちが太陽に向かって攻めて行くことはできない，生駒山を越えて大和に入ることは困難と判断して，大阪湾を今度は南下することになる。

私が勤務する桃山学院大学のキャンパスは和泉市の高台にあって，研究室の窓からは，古代には茅渟の海といった大阪湾が見える。晴れ渡っていれば遠く淡路島をつなぐ明石大橋が見え，北方には六甲の山並みも見える。太陽の沈むはるか西の向こうからカムヤマトイハレヒコの船団がやって来て，大阪湾に侵入したものの，生駒山を越えることができず，撤退して，大阪湾を紀州の方に南下して行く，その行程を目で追うことができる。

カムヤマトイハレヒコの兵たちは熊野まで至り，なぜかあの熊野の広大な原生林を越えて吉野から大和に入る。まるで中国共産党の延安への長征を思わせるが，実際には可能とは思えないし，意味のあることとも思えない。やはり神話の領分での話と考えるしかない。その間，熊野の高倉下，頭八咫烏，兄猾・弟猾，井光，八十梟帥，兄磯城・弟磯城など，抵抗や帰順の興味深いエピソードに事欠かないが，大和の豪族たちも服属させた後に，最後にふたたびナガスネヒコと対峙することになる。今度もナガスネヒコの軍は強盛で，カムヤマトイハレヒコの軍はなかなか勝つことができなかった。そこに，にわかに天が曇って氷雨が降って来

る。金色の霊鵄が飛んできてカムヤマトイハレヒコの携えた弓の弭に止まる。その鵄は金色にまばゆく光り，まるで稲光のようであったために，ナガスネヒコの軍は幻惑されて戦意を喪失することになる。

時に長髓彦，乃ち行人を遣して，天皇に言して曰さく，『嘗，天神の子有しまして，天磐船に乗りて，天より降り止でませり。号けて櫛玉饒速日命（饒速日，此をば你芸波椰卑と云ふ）と曰す。是吾が妹三炊屋媛（亦の名は長髓媛。亦の名は鳥見屋媛）を娶りて，遂に児息有り。名をば可美真手命（可美真手，此をば于魔詩莽耐と云ふ）と曰す。故，吾，饒速日命を以て，君として奉へまつる。夫れ天神の子，豈両種有さむや，奈何ぞ更に天神の子を称りて，人の地を奪はむ。吾心に推るに，未必為信ならむ』とまうす。天皇の曰はく，『天神の子亦多にあり。汝が君とする所，是実に天神の子ならば，必ず表物有らむ。相示せよ』とのたまふ。長髓彦，即ち饒速日命の天羽羽矢一隻及び歩靫を取りて，天皇に示せ奉る。天皇，覧して曰はく，『事不虚なりけり』とのたまひて，還りて所御の天羽羽矢一隻及び歩靫を以て，長髓彦に賜示ふ。長髓彦，其の天表を見て，益踧踖ることを懐く。然れども凶器已に構へて，其の勢，中に休むこと得ず。而して猶迷へる図を守りて，復改へる意無し。饒速日命，本より天神慇懃したまはくは，唯天孫のみかといふことを知れり。且夫の長髓彦の稟性愎很りて，教ふるに天人の際を以てすべからざることを見て，乃ち殺しつ。其の衆を帥いて帰順ふ。天皇，素より饒速日命は，是天より降れりといふことを聞しめせり。而して今果して忠効を立つ。則ち褒めて寵みたまふ。此物部氏の遠祖なり。

ナガスネヒコがいうには，すでに天神の子が天の磐船に乗って天からやって来ていて，その名前はニギハヤヒノミコトといい，自分の妹のナガスネヒメと結婚をして，子どものウマシマデノミコトまでもうけている。天の神に二種類があるのだろうか，というナガスネヒコの質問が面白い。遅れてやって来たカムヤマトイハレヒコ一行は偽物なのではないか。その偽物が人の国を奪おうとしてやって来るとは怪しからぬということになる。

それに対して，カムヤマトイハレヒコは，天神族というのもたくさんあり，もしお前がいうニギハヤヒノミコトが天神の子孫であれば，きっとそれを証明するものをもっているであろう，それを見せよ，といい，ナガスネヒコは天孫族固有の矢とヤナグイを見せたとある。それが本当に天孫族固有のものであることを確認した上で，カムヤマトイハレヒコもまた自分たちが天孫族であることを証明する矢とヤナグイを見せた。ナガスネヒコはそれを見て恐縮するものの，すでに戦闘態勢を整えて，高まった兵たちの士気を抑えることができず，当初の作戦を撤回することもできない。ニギハヤヒノミコト自身についていえば，天孫族は天孫族を悪いようには扱わないと判断し，しかし，ナガスネヒコは性格がひねくれているし，天孫族と土着の人とは越えられない障壁があると判断して，なんとも無惨な話だが，妻の兄のナガスネヒコを殺して，カムヤマトイハレヒコに帰順することになる。カムヤマトイハレ

ヒコはこのニギハヤヒノミコトの一族を優遇したが，これが物部氏の先祖だということになる。だが，これは常に男系のイデオロギーがかったジェネアロジーであり，物部氏は母系で長髄媛の血を受け継いでいることは強調しておいていい。

三　石上神社のこと

もう一つ，「物部首」にかかわる『日本書紀』の垂仁紀の記事も検討しておこう。

三十九年の冬十月に，五十瓊敷命，茅渟の菟砥川上宮に居しまして，剣一千口を作る。因りて其の剣を名けて，川上部と謂ふ。亦の名は裸伴（裸伴，此をば阿箇播娜我等母と云ふ）と曰ふ。石上神宮に蔵む。是の後に，五十瓊敷命に命せて，石上神宮の神宝を主らしむ（一に云はく，五十瓊敷皇子，茅渟の菟砥の河上に居します。鍛名は河上を喚して，大刀一千口を作らしむ。是の時に楯部・倭文部・神弓削部・神矢作部・大穴磯部・泊橿部・玉作部・神刑部・日置部・大刀佩部，併せて十箇の品部もて，五十瓊敷皇子に賜ふ。其の一千口の大刀をば，忍坂邑に蔵む。然して後に，忍坂より移して，石上神宮に蔵む。是の時に，神，乞して言はく，「春日臣の族，名は市河をして治めしめよ」とのたまふ。因りて市河に命せて治めしむ。是，今の物部首の始祖なり）。

垂仁天皇は狭穂姫を亡くした後，丹波の道主王の五人の娘と結婚した（古事記では四人）。古代の日本で多く行われたソロレート婚であるが，ただし，末の妹の竹野媛は醜かったので故郷に帰され，その途中で身投げをして死んだという悲しい逸話が残る。五人姉妹の長姉である日葉酢媛とのあいだに五人の子どもが生まれる。第一に五十瓊敷入彦命，第二に大足彦尊，第三に大中姫尊，第四に倭姫尊，第五に稚城瓊入彦命である。垂仁紀三十年に，五十瓊敷入彦命と大足彦尊兄弟のあいだで垂仁後の皇位継承について取り決めがなされた旨の記事がある。

三十年の春正月の己未の朔甲子に，天皇，五十瓊敷命・大足彦尊に詔して曰はく，『汝等，各情願しき物を言せ』とのたまふ。兄王諮さく，「弓矢を得むと欲ふ」とまうす。弟王諮はく，「皇位を得むと欲ふ」とまうしたまふ。是に，天皇，詔して曰はく，「各情の随にすべし」とのたまふ。則ち弓矢を五十瓊敷命に賜ふ。仍りて大足彦尊に詔して曰はく，「汝は必ず朕が位を継げ」とのたまふ。

古代日本においては必ずしも長子相続ではなかったことは古事記・日本書紀を読めばすぐに気づく。そもそも初代から，天皇家では，五瀬命が死んだからとはいえ，カムヤマトイハレヒコ（神武天皇）は末弟であった。第二代の崇神天皇も第三代の垂仁天皇も長子とはいえないし，垂仁には狭穂姫とのあいだに誉津別命がいたが，母の死の衝撃からか大人にな

るまで口がきけず，皇位継承からは外されていたかに見える。そして，日葉酢媛の長子であるイニシキノミコトはここで皇位の放棄をあっさりと宣言し，弟のオホタラシヒコノミコトが垂仁を継ぐことになる（景行天皇）。兵権よりも祭祀権を優先させる天皇制のあり方がここにはすでに表れているともいえる。イニシキノミコトは兵権を選んだことになるが，それはどうやら軍需産業を掌握することでもあったらしい。そのことを崇仁紀三十九年の記事は如実に語っているともいえる。ここでいう「茅渟の菟砥河上宮」というのは，阪南市を流れる菟砥川の上流の現在の玉田山に比定される。イニシキノミコトはそこに宮を造って落ち着き，千本の大刀を作らせたというのである。

その千本の大刀を川上部というのは，「一に云はく」以下のヴァリアントのいうように，川上という土地の鍛冶集団の作った大刀だからいうのであろうが，刀剣は後代においても製作者の名前でもって呼ばれ，「正宗」や「長船」のように一種擬人化すらされるところがある。「裸伴」というのは鞘に納めず刀身のままだったからとも，その切れ味が甲冑を帯びた敵であってもまるで裸身を切るがごとくであったからともいうが，冴え冴えとした刀身をイメージさせて，官能的ともいえる。くりかえすが，「もの」という古語はそこに内包する霊的なものをも意味する。現代人でもフェティッシュな思考から免れているわけではないが，「川上部」は他とは差異化された特別な刀剣だったのだと思われる。それを後に石上神宮に納めて，イニシキノミコトが管理したというのである。「一に云はく」のヴァリアントでは，さらに楯，弓，矢などの兵器製作者の集団，織布，土器（泊橿），玉の製作者集団，刑吏，警察軍事（大刀佩）などの十の品部をすべてイニシキノミコトに与えたということになっている。

ここにいう「品部」とはいったい何なのだろうか。岩波古典文学大系本で「とものみやつこら」という訓を丁寧につけているが，『日本史広事典』では「品部（しなべ）」について，次のようにいう。

【品部】「ともべ」とも。朝廷により組織された特殊な部。大化前代の品部は，『日本書紀』垂仁三九年条の伝承にある楯部（たてぬいべ）・神弓削部（かむゆげべ）・玉作部（たまつくりべ）などの十種の品部が著名。当時はさまざまの職業部が，伴造（とものみやつこ）に管掌されて朝廷に物資と労働力を提供し，伴造の経済的基盤となったらしい。最近では名代（なしろ）の部も品部の一種とする説がある。律令時代には大化前代の品部の一部が残存し，たとえば図書寮（ずしょ）の紙戸五十戸，造兵司の楯縫（たてぬい）三六戸，漆部司（ぬりべのつかさ）の漆部一五戸のように，伝統的諸官司に配備されたものとするのが有力な学説である。彼らは所属官司に上番して特殊な労役に服し，調・庸・雑徭（ぞうよう）の全部または一部を免除された。

そして，「伴造（とものみやつこ）」は別に次のように説明されている。

【伴造】大和政権において伴（とも）や部（べ）を領有・管理し，朝廷の職務を分掌した官人。「臣連伴造・国造百八十部」と称され，臣（おみ）・連（むらじ）につぐ地位を占めた。大伴連・物部連・中臣連など連は上

級の伴造ともいうべきものであるが，一般に伴造というと，それ以下の身分である忌部首・玉作造・秦造・漢直などをさす。忌部首は紀伊・阿波などの諸国の忌部を統轄し朝廷に必要な物資をださせた。『日本書紀』欽明元年八月条に，秦人の七〇五三戸を戸籍につけ，秦大津父を秦伴造としたとあり，伴造の勢威をうかがうことができる。律令制下に各官司では伴造―品部・雑戸の関係がみられ，伴部を伴造とも称したのは，大和政権の伴造の名残であろう。

またこのヴァリアントでは，一千口の大刀ははじめ忍坂邑に蔵め，後に石上に移したとし，またそのとき，神の要求があり，春日臣の一族の市河に官吏させることになったとする。そして，その市河が物部首の祖先なのだとする。

垂仁紀は三十九年の記事のすぐ後に八十七年の記事が続く。

八十七年の春二月の丁亥の朔辛卯に，五十瓊敷命，妹大中姫に謂りて曰はく，「我は老いたり。神宝を掌ること能はず。今より以後は，必ず汝主れ」といふ。大中姫命辞びて曰さく，「吾は手弱女人なり。何ぞ能く天神庫に登らむ」とまうす（神庫，此をば保玖羅と云ふ）。五十瓊敷命の曰はく，「神庫高しと雖も，我能く神庫の為に梯を造てむ。豈庫に登るに煩はむや」といふ。故，諺に曰はく，「天の神庫も樹梯の随に」といふは，此其の縁なり。然して遂に大中姫命，物部十千根大連に授けて治めしむ。故，物部連等，今に至るまでに，石上の神宝を治むるは，是其の縁なり。昔丹波国の桑田村に，人有り。名を甕襲と曰ふ。則ち甕襲が家に犬有り。名を足往と曰ふ。是の犬，山の獣，名を牟士那といふを咋ひて殺しつ。則ち獣の腹に八尺瓊の勾玉有り。因りて献る。是の玉は，今石上神宮に有り。

イニシキノミコトもすでに年老い，石上神宮の神宝の管理に疲れてしまった，そこで妹のオホナカツヒメに代わって欲しいという。しかし，オホナカツヒメは自分も年を取っていて，しかも女性の身で高床式の庫には登れないと答える。イニシキノミコトはそれなら梯子をかければ大丈夫だといい，「天の神庫も梯子をかければ大丈夫」という諺のもとになったという。どこかで，『仮名手本忠臣蔵』の一力茶屋の場面を彷彿させる。お軽が二階にいて密書を覗いているのに気づき，由良之助は梯子をかけてお軽を下に下ろして殺そうとする。お軽にとっては生命にかかわる危うい場面なのに，由良之助は「船玉さまが見える」などときわどい冗談をいう。この記事にもその種のきわどさがあるような気がする。オホナカツヒメは梯子を登り降りしなければならないような仕事を回避して，神宝の管理を物部十千根大連に譲ってしまう。ここで，十箇の品部もそのまま物部連に継承されたと考えていいのだと思われる。

四『先代旧事本紀』の記述を読む

以上にみたとおり，天照大神の孫の降臨から続く天皇制イデオロギーを前面に打ち出した『日本書紀』ですら，物部氏の存在を無視することができず，ニギハヤヒノミコトの降臨がニニギノミコトの降臨に先行することを否定できなかった。この論考では『日本書紀』にそって物部氏の輪郭を理解すれば，それで十分に事足りるのだが，『先代旧事本紀』の記事も一瞥しておきたい。偽書であるかどうかはともかく，こちらは汎ニギハヤヒ＝物部イデオロギーを全面的に展開することになる。

『先代旧事本紀』巻第三「天神本紀」は次のように始まる。

正哉吾勝々速日天押穂耳尊に，天照太神の曰く，「豊葦原千秋長五百秋長瑞穂国は，吾が御子正哉吾勝々速日天押穂耳尊の知らすべき国なり」と言寄さし詔りたまふ。天降りますとき，高皇産霊尊の児思兼神の妹万幡豊秋幡豊秋津師姫栲幡千々姫命を妃として天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊を誕生せり。正哉吾勝々速日天押穂耳尊奏して曰さく，「僕まさに降らんとして装束ふ間，生るるところの児，これをもって降すべし」とまうす。詔してこれを許したまふ。天神御祖詔して，天璽瑞宝十種を授けたまふ。謂はく，羸都鏡一つ，辺都鏡一つ，八握剣一つ，生玉一つ，死反玉一つ，足玉一つ，道反玉一つ，蛇比礼一つ，蜂比礼一つ，品物比礼一つ，是らなり。天神御祖教え詔して曰はく，「もし痛きところ有らば，この十の宝をして，一・二・三・四・五・六・七・八・九・十と謂ひてふるへ，ゆらゆらとふるへ，此の如く之をなせば，死人も生き反るべし」と。是，則ち所謂「ふる」の言の本なり

アマテラスは豊葦原の瑞穂の国にまず自分の子のアメノオシホミミを天下らせようとした。ところが，アメノオシホミミはタカミムスビの娘のタクハタチヂヒメと結婚して，その間にニギハヤヒが生まれたので，自分ではなく，ニギハヤヒを天降りさせることを願い，アマテラスはそれを許可したというのである。この記述は記・紀とそう異なるところはないが，記・紀ではもう少し紆余曲折があって，まずアメノオシホミミを天降らせようとしたところ，豊葦原の瑞穂の国は「いたくさやぎて」あるようだったので，アメノオシホミミは恐れをなして引き返した。そこで，八万の神たちが相談して，まずは天菩比神を天降らせ，さらには天若日子を天降らせるが，国つ神に懐柔されて復奏しなかった。その後，建御雷神を降らせ，大国主命に国譲りをさせた後に，その間にアメノオシホミミとタクハタチヂヒメの間に番能邇々芸命が生まれたので，このホノニニギを天降らせたことになっている。

アマテラスは天降るニギハヤヒに十種の宝を与え，その宝を用いて行う呪術の方法を教える。あるいは「ひ，ふ，み，よ・・・」という斬新な数学，「十進法」を伝えたといえるのかも知れない，その数は呪文の働きをして，死者をもよみがえらせる「フル」の秘儀は執行されたということになるであろう。この神道は物部氏に伝わることになる。『先代旧事本紀』は続けて，タカミムスビが天降るにニギハヤヒに，

「もし葦原中国の敵，神人を拒みて待ち戦ふ者有らば，能く方便して誘ひ欺き，防ぎ拒む

べし」

といい，三十二柱の神々を随行させたとし，その神々を列挙している。

天香語山命（尾張連等祖），天鈿売命（猨女君等祖），天太玉命（忌部首等祖），天児屋命（中臣連等祖），天櫛玉命（鴨県主等祖）・・・

というようにである。近畿だけにとどまらず，九州から中国，そして中部，関東の広域にわたる豪族の祖先神たちがそこには含まれ，また，

天糠戸命（鏡作連等祖），天明玉命（玉作連等祖）

などの工人集団の祖先にあたる神々もいる。

その中に，

少彦根命（鳥取連等祖）

として，鳥取氏の祖先神も名を連ねていることをここでは強調しておきたいが，文脈上，ここの三十二柱の神々は戦闘要員としても饒速日尊に随行したことになる。

饒速日尊とともに天降ったのは三十二柱の神々だけではなかった。他に，鍛冶や笠縫などの五つの「部人」，五つの「部造」，そして「天物部」として二十五の「部人」らもいっしょであり，それらの名前が列挙される。さらに天の磐船の「船長」もいたし，「舵取り」もいたし，「船子」も「船大工」もいたらしいのである。最近の新聞記事で感銘を受けたものがあった。切り抜きをしたはずなのだが，今は手元にない。大阪の東成区の深井には笠縫が伝承されていて，大嘗祭に使用される笠はここで作られ宮内庁に献納されるのだということであった。古い時代に笠の材料である菅が密生している深井に大和から移住したといい，ニギハヤヒとともに天降った「部人」の末裔とその技術が今になお生き残っているらしいのである。

ニギハヤヒには実に大勢の集団が随行して豊葦原の瑞穂の国に天降ったことになる。時系列でいえば，しばらく後に，ホノニニギは遠く九州の高千穂の峯に天降ったのだったが，ニギハヤヒはそれに先立っていったいどこに天降ったのだろうか。

饒速日尊，天神御祖の詔を稟け，天の磐船に乗りて河内の国の河上の哮峰に天降りまし，則ち大倭の国の鳥見白庭山に遷ります。いはゆる天の磐船に乗りて大虚空を翔けり行き，是の郷を巡り睨て天降ります。即ち虚空見日本国と謂ふは是か。饒速日尊，便ち長髄彦の妹御炊屋姫を娶りて妃と為し，任胎ましめたまふ。いまだ産む時に及ばざるに，饒速日尊神損去ります。

ニギハヤヒが天の磐船に乗って天降った最初の場所は河内の哮峯であり，その後すぐに大和の国の鳥見の白庭山に遷ったということになっている。交野から枚方の傾斜地を北の淀川に向けて天の河が流れる。氾濫を繰り返しそのために堤を築き上げてきた歴史から天井川になっていて，そのことからの名前だと考えられるのだが，花崗岩の砕かれた砂が光り輝くことからくる名前だともいう。『伊勢物語』の「世の中に絶えて桜のなかりせば春の心は

のどけからまし」という歌の出てくる有名な章段にもこの川がでてくる。

「よき所を求めゆくに，天の河といふ所にいたりぬ。親王に馬頭，大御酒まゐる。親王のたまひける，『交野を狩りて，天の河のほとりに至るを題にて，歌よみてさか月はさせ』とのたまうければ，かの馬頭よみて奉りける。

狩り暮らし棚機つ女に宿からむ天の河原に我は来にけり」

春の行楽ののどかな趣を尽して読む者までも酩酊させてしまう文章である。

この天の河の源が哮峯であり，磐船神社がある。そこに確かに大きな磐があって，これが磐船なのだというが，ニギハヤヒはここに最初に天降り，すぐに大和の国の鳥見の白庭山に遷ったという。哮峯と白庭山，河内と大和と国名が違い，大阪と奈良と府県名が違うと，かなりの距離を考えがちであるが，実は京阪奈丘陵の直線距離で４キロほどのハイキングコースにもならない指呼の間にこの二つの伝承地はある。

磐船神社

五　鳥取万，そして義犬の伝承

丁未の年（587）の「宗教戦争」において，物部氏もその傘下にあった物部も一敗地に塗れることになる。物部守屋の死も印象深く，多くの戦士たちの死があったのに違いないが，特に印象深いエピソードとして，日本書紀は物部守屋の「資人」として難波の家を百人ほどの兵とともに守った捕鳥部万の奮戦とその死，そして万の死体の側を離れなかった犬の話を記す。

物部守屋大連の資人捕鳥部万（万は名なり），一百人を将て，難波の宅を守る。而して大連滅びぬと聞きて，馬に騎りて夜逃げて，茅渟県の有馬香邑に向く。仍りて婦が宅を過ぎて，遂に山に匿る。朝廷議りて曰はく，「万，逆心を懐けり。故，此の山の中に匿る。早に族を滅ぼすべし。な怠りそ」といふ。万，衣裳弊れ垢つき，形色憔悴けて，弓を持ち剣を帯きて，独り自ら出で来れり。有司，数百の衛士を遣して万を圍む。万，即ち驚きて篁藪に匿る。縄を以て竹に繫けて，引き動して他をして己が入る所を惑はしむ。衛士等，詐かれて，揺く竹を指して馳せて言はく，「万，此に在り」といふ。万，即ち箭を発つ。一つとして中らざること無し。衛士等，恐りて敢へて近つかず。万，便ち弓を弛して腋に挟みて，山に向ひて走げ去く。衛士等，即ち河を夾みて追ひて射る。皆中つること能はず。是に，一の衛士有りて，疾く馳せて万に先ちぬ。而して河の側に伏して，擬ひて膝に射中てつ。万，即ち箭を抜く。弓を張りて箭を発つ。地に伏して号ひて曰はく，「万は天皇の楯として，其の勇を効さむとすれども，推問ひたまはず。翻りて此の窮に逼迫めらるることを致しつ。共に語るべき者来れ。願は

くは殺し虜ふることの際を聞かむ」といふ。衛士等,競ひ馳せて万を射る。万,便に飛ぶ矢を払ひ捍きて,三十余人を殺す。仍,持たる剣を以て,三に其の弓を截る。還,其の剣を屈げて,河水裏に投る。別に刀子を以て頸を刺して死ぬ。河内国司,万の死ぬる状を以て,朝廷に牒し上ぐ。朝庭,符を下したまひて称はく,「八段に斬りて,八つの国に散し梟せ」とのたまふ。河内国司,即ち符旨に依りて,斬り梟す時に臨みて,雷鳴り大雨ふる。

爰に万が養へる白犬有り。俯し仰ぎて其の屍の側を廻り吠ゆ。遂に頭を噛ひ挙げて,古冢に収め置く。横に枕の側に臥して,前に飢ゑ死ぬ。河内国司,其の犬を尤め異びて,朝廷に牒し上ぐ。朝廷,哀不忍聴りたまふ。符を下したまひて称めて曰はく,「此の犬,世に希聞しき所なり。後に観すべし。万が族をして,墓を作りて葬さしめよ」とのたまふ。是に由りて,万が族,墓を有真香邑に双べ起りて,万と犬とを葬しぬ。河内国司言さく,「餌香川原に,斬されたる人有り。計ふるに将に数百なり。頭身既に爛れて,姓字知り難し。但衣の色を以て,身を収め取る。爰に桜井田部連膽渟が養へる犬有り。身頭を噛ひ続けて,側に伏して固く守る。己が主を収めしめて,乃ち起ちて行く」とまうす。

物部守屋は渋川の屋敷にいて,難波の宅を鳥取万は守っていたというのだが,この難波の宅は今の森ノ宮（鵲森宮）あたりだと比定される。そこで敗れ,南に逃れ,妻の家のある有真香邑を過ぎた山の中に籠もる。その鳥取の一族のつわものぶりは名をとどろかせていたのであろう。朝廷は一族の殲滅をはかる。万はただひとり残ったというのか,破れて垢のついた服と憔悴した顔つきをして山から出て奮戦を続ける。ここに「もののふ」の原型を見る思いがする。武の技能の習練とともに「こころ」も刃金のように鍛錬されていて,「死に狂ひ」をして戦う。「武士道とは死ぬことと見つけたり」と言上げせずとも,連綿と地下水脈のように生き続けた,生死のはざまを容易に超えることのできる価値観,あるいは美意識,あるいはモラルといていいものの源流が生の形で表れているように思うのだが,これが六世紀の話だとすれば,それが社会の表舞台に噴出するのは十世紀のことになる。

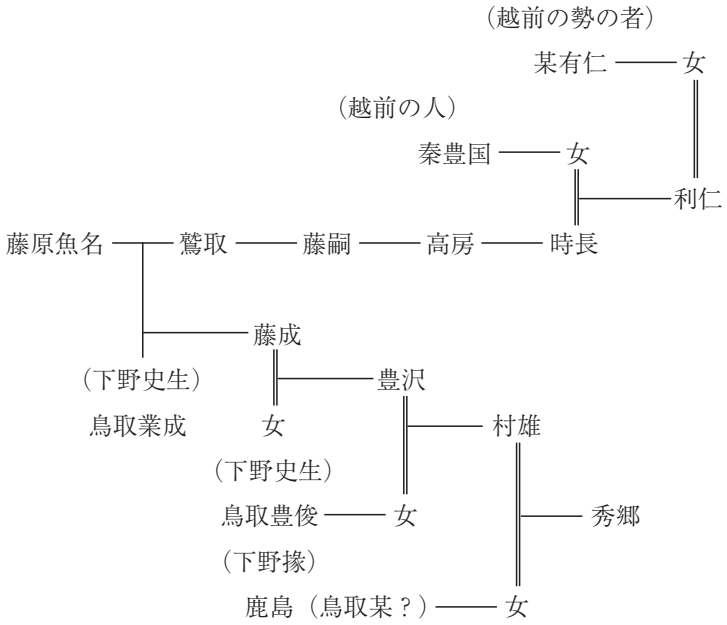
大きな謎のように見えていた「武士」の出現という現象について,最近,桃崎有一郎氏が斬新な説を出された。そこでは「武士」がいつ,どこで,なぜ,どのように登場したかを鮮やかに解き明かされている。桃崎氏はいう。

国造の時代から何世紀もかけて形成された,古代の郡司富豪層の地方社会に対する支配的な地位と,彼らの濃密なネットワークに,血筋だけ尊い王臣子孫が飛び込み,血統的に結合して,互いに不足するもの（競合者を出し抜くための尊さと地方支配の力）を補い合った。そして,秀郷流藤原氏は蝦夷と密着した生活から,源平両氏は伝統的な武人輩出氏族（将種）の血を女系から得て,傑出した武人の資質を獲得した。武士とは,こうして

【貴姓の王臣子孫×卑姓の伝統的現地豪族×準貴姓の伝統的武人輩出氏族（か蝦夷）】

の融合が，主に婚姻関係に媒介されて果たされた成果だ。武人は複合的存在なのである

父系の一方だけにとらわれず，母系を重視することで，いわれてみれば，当たり前のことが判明する。ただ単に桓武天皇の子孫である，あるいは清和天皇の子孫である，藤原家の子孫であるというだけでは「武士」にはなれない。「武士」はハイブリッドな存在として誕生したというのだが，最初の「武士」といっていい一人の藤原秀郷について，桃崎氏は次のような系譜を作成して掲げている。



（桃崎氏は秀郷の母の父の「下野掾鹿島」の「鹿島」を「鳥取」の誤記としている）

桃崎氏は，芥川龍之介の『芋粥』でも知られる，同じく藤原魚名流の利仁がなぜ越前で勢威を蓄えるに至ったかと対比して語るのだが，河内（和泉）を本拠地とした鳥取氏は関東にも移住して，下野国で勢力をたくわえて「下野掾」という任用国司を出せるまでの郡司富豪層を形成していた。これは「卑姓の伝統的現地豪族」というべきなのであろうが，藤原秀郷の祖先は，魚名の子の藤成以来，その鳥取氏と結婚を繰り返し，藤原秀郷の血の八分の七は鳥取氏の血だというのである。とすれば，鳥取万の血と同じ血が藤原秀郷の子孫だという奥州藤原氏にも，佐藤氏にも，つまり義清（西行）にも，義経にしたがった継信にも忠信にも（二人の奮戦とその死はまさに鳥取万を彷彿させる），小山氏や結城氏（結城合戦での一族の死はやはり見事というしかない）にも，そして九州の大友氏にも少弐氏にも，そしてそれこそ『葉隠』の鍋島氏にも延々と受け継がれていたことになる。

さて，この鳥取万の死には「義犬」伝説も付け加わる。『コーラン』の中でもフォークロア的な色彩の強いといわれる「エフェソスの七人の眠り人」の逸話で，洞窟の中で眠り込んだ七人を洞窟の入り口で守り続けた犬の話が思い出されるが，武人としての鳥取万を考えると，この犬にはまた別の性格があるように思われる。人類と犬の先祖は狩猟者としてはライヴァル関係にあり，それが共生するようになり，やがて力関係で人が圧倒するようになって，犬は家畜化することになる。しかし，猫とはちがって，近代になるまでは単に愛玩するだけのペットではなく，人にとって大いに有用な仕事を任されていた（２）。先に犬養の地名，あるいは県犬養氏の説明で触れたように，屋敷や屯倉，神社の番犬となり（狛犬はその名残である），当然，狩猟犬でもあったし，狩猟の対象を人に変えれば，警察犬にも，戦闘犬にもなったはずである。

私がフランスにいたとき，2015 年 11 月 13 日にはパリで IS のメンバーによる同時多発テロがあったことは前稿で述べた。その日から，パリ市内では至る所で，警察あるいはジャンダルムが犬とともに巡回しているのがみられ，地下鉄に乗っていても犬がやって来て乗客の匂いを嗅ぎまわった。そうして，11 月 18 日には，ジャンダルムがサン・ドニにある IS のアジトに踏み込んで犯人たちを掃討したのだが，そのときのテレビ・ニュースの解説が興味深かった。まず，あるアパルトマンの一室が犯人たちのアジトであり，そこに数名の犯人たちが今現在いることを確認した後，近辺の人びとには退去を命じ，そして，ドアを開けて最初に飛び込んだのは人間ではなく，犬なのであった。犬がひとしきり犯人たちにダメージを与えた後，警察あるいはジャンダルムが踏み込んで，そしてメンバーたちを射殺した（逮捕などという生半可なことではなかった）。ガリア以来の軍用犬の歴史を垣間見た思いであった。

また，トランプ前アメリカ大統領の物議をかもすことの多かったツイッターに面白いものがある。2019 年 10 月 28 日のものである。

We have declassified a picture of the wonderful dog（name not declassified）that did such a GREAT JOB in capturing and killing the Leader of ISIS, Abu Bakr al-Baghdadi!

IS のアブ・バクル・アル・バグダディ最高指導者を追い詰めて殺す大仕事をやってのけたのは，名前は伏せたままなのだが，犬であったことを述べ，その写真を公開している。現代においてなお軍用犬が大いに活躍しているのである。ただ，ここまで書いて来て，この特殊部隊の軍用犬を駆り立てる姿勢には，いくら敵対者だからといってもその人間性へのリスペクトが欠如した無惨な印象を禁じえない。

しかし，戦闘犬の性格を帯びた woderful dog が，実は日本の古典文学の傑作の一つといっていい作品に登場する。滝沢馬琴の『南総里見八犬伝』である。この読み本の冒頭，窮地に陥った里見義実が，敵将の安西景連の首を取ったら，娘の伏姫を褒美としてやろうと口にしたことから，犬の八房は実際に景連の首をくわえて戻ってくる。しかし，八房は忠犬とも義

犬とも言えず，妖犬，あるいは霊犬というべきかもしれない。八房の行動の源泉は伏姫への恋であり，交わりはなかったことに馬琴はするが（そうするしかない），八房の精気が八犬士の誕生につながることになる。

ところで，岸和田市の天神山町は今は住宅地になっているが，そのところどころにこんもりとした森が残されている。古代の古墳群の名残なのだが。その一つは鳥取万の墓とされ，そこから少し離れたところにある墳丘が万の飼犬の墓だと伝承されている。考古学的な根拠があるわけではないものの，難波の物部守屋の家から逃れ，妻の有真香邑の家を過ぎて，隠れた森というのは，確かにこのあたりになるはずである。

鳥取万の墓碑

鳥取万の犬の墓碑

六　鳥取郷

さて，藤原秀郷の身体に色濃く流れている鳥取氏の血について先述したが，「鳥取」という町名は阪南市に今も残っていて，そこが鳥取万の本貫だったのだと思われる。だが，『和名抄』で「鳥取郷」と称される地域はさらに広い地域であったらしい。『大阪府の地名Ⅱ　日本歴史地名大系 28』には次のようにいう。

鳥取郷　「倭名抄」は「止々利」と訓ずる。「和泉志」は尾崎･下出･黒田･新･石田･波有手･中・自然田・山中・桑畑・貝掛・舞の諸邑（現泉南郡阪南町）を郷域とするが，下庄と称された箱作（現同上），淡輪・深日・孝子・谷川・東畑・西畑・小島（現泉南郡岬町）も含むとみるべきであろう。式内社としては波太（現阪南町），国玉（現岬町）の二社がある（町名は 1989 年時点）。

実に広大な地域で，そこを鳥取氏は本拠地として，「もののべ」の生業にいそしんでいた

のだと思われるが，垂仁紀にはこの鳥取氏の由来にかかわるエピソードがある。

二十三年の秋九月の丙寅の朔丁卯に，群卿に詔して曰はく，「誉津別王は，是生年既に三十，八掬髯鬚むすまでに，猶泣つること児の如し。常に言はざること，何由ぞ。因りて有司せて議れ」とのたまふ。

冬十月の乙丑の朔壬申に，天皇，大殿の前に立ちたまへり。誉津別皇子侍り。時に鳴鵠有りて，大虚を度る。皇子仰ぎて鵠を観して曰はく，「是何物ぞ」とのたまふ。天皇，則ち皇子の鵠を見て言ふこと得たりと知しめして喜びたまふ。左右に詔して曰はく，「誰か能く是の鳥を捕へて献らむ」とのたまふ。是に鳥取造の祖天湯河板挙奏して言さく，「臣必ず捕へて献らむ」とまうす。即ち天皇，湯河板挙（板挙，此をば拕儺と云ふ）に勅して曰はく，「汝是の鳥を献らば，必ず敦く賞せむ」とのたまふ。時に湯河板挙，遠く鵠の飛びし方を望みて，追ひ尋ぎて出雲に詣りて，捕獲へつ。或の曰はく，「但馬国に得つ」といふ。

十一月の甲午の朔乙未に，湯河板挙，鵠を献る。誉津別命，是の鵠を弄びて，遂に言語ふこと得つ。是に由りて，敦く湯河板挙に賞す。則ち姓を賜ひて鳥取造と曰ふ。因りて亦鳥取部・鳥養部・誉津部を定む。

ホムツワケというのは，垂仁天皇とのあいだに狭穂媛が生んだ子である。兄の狭穂彦が皇位の簒奪を企てた過程で，垂仁と狭穂彦の争いとなり，狭穂姫は狭穂彦が稲で作った砦に逃げ込んだが，夫の軍に攻められて火を放たれ，その火の中で生まれたホムツワケだけを夫の垂仁天皇に渡して，みずからは狭穂彦ともに死を選んだ。ホムツワケにはその赤子のときのトラウマがあって，永いあいだ口が聞けなかったということなのであろう。それが鵠が大空を渡るのを見たときに，「あれは何だ」と初めて声に出したというのである。同じような子どものエピソードを大江健三郎がノーベル文学賞の受賞のスピーチの中で語っていた（4）。息子の光クンがはじめて発したことばは「クイナ」だったというのだが，川端康成を意識しつつ，川端とはちがって自己の過去の日本文化との断絶を強調するスピーチで，はるか昔の神話の型にはまった話をしたので記憶に残っている。アメノユカワダナがホムツワケに口を開かせた鳥を探して，出雲まで（あるいは但馬まで）行って，その鳥を捕らえて帰って来たと，『日本書紀』はいう。光クンはクイナをきっかけに音楽への道を切り開いたが，ホムツワケ王は鵠をきっかけにことばを獲得した。鵠を捕らえて帰ってきた褒美として，アメノユカワダナは「鳥取造」の姓をもらい，その下に鳥取部，鳥養部，そして誉津部を定めたことがここでは記されている。

ここで，先に触れた垂仁紀三十九年の記事が問題になってくる。

「三十九年の冬十月に，五十瓊敷命，茅渟の菟砥川上宮に居しまして，剣一千口を作る。因りて其の剣を名けて，川上部と謂ふ。亦の名は裸伴（裸伴，此をば阿箇播娜我等母と云ふ）と曰ふ。石上神宮に蔵む」

剣一千口を作ったという菟砥川上宮というのはまったくの鳥取郷の中にある。菟砥川は鳥取郷を貫ぬく形で流れる川であり，その菟砥川上宮は今の玉田山公園がその跡地だと考えられている。イニシキノミコトは父の垂仁天皇から軍事権を譲られたのだったが，その武器製作を担当したのはアマノユカハダナら，鳥取の人びとだったと考えられる。

菟砥川上宮があったとされる玉田山から大阪湾を眺望する

玉田山の麓にある古墳

ところで，物部についての論説として，詩人としての直感が横溢してはなはだ魅力的でありながら，その横溢する詩ゆえに取り扱いかねている書物がある。谷川健一氏の『白鳥伝説』（５）であり，また『四天王寺の鷹』（６）がそれである。後者の四天王寺が物部氏の鎮魂の寺，あるいは見方を変えれば，調伏の寺であるとする説はその通りだと思うし，四天王寺をおおう晴れやかな虚無とハンセン氏病者をも包容し掬い取る無限の慈悲の空気は，日本一の古刹でありながら，奈良や京都のどんな古刹ももたない独自なものであろう。大阪という町の中心にある寺の本質を谷川氏は見事に捕らえているように思う。『白鳥伝説』は，これまでこの論考でたどってきたように，ホノニニギに先行して天降り，そしてその曽孫のカムヤマトイハレヒコが大和に来るより以前に，すでに大和を治めていたニギハヤヒ＝物部について述べ，抵抗して敗れたナガスネヒコとは別に，東国に撤退して抵抗を続けた物部たちについて述べる。なぜ「日下」を「くさか」と呼ぶのか，「日の下の草香」と続く「日の下」という枕詞から「日本」の国号が説明されるのだが，その「日の下」が生駒山西麓の潟湖の「草香」からどんどん東に移動するのは物部の東漸をも意味することになる。そして，物部は軍事集団であるとともに，工人集団でもあり，その中でも先進的な技術であった鍛冶の技術を中心に置く集団でもあったということになろう。白鳥伝説はまた鍛冶集団とも無縁ではないというのが，谷川説の骨子となる。踏鞴（たたら）の鞴（ふいご）が鳥を連想させ，また鳥が「羽ばたく」ことを古代の日本語で「はぶく」というが，その連用形の「はぶき」はそれこそ鞴を意味する。たとえば，天照大神が岩戸に隠れて，世の中が真っ暗闇になってしまった。思兼命という知恵者が天照大神の姿を写して誘き出そうと鏡の制作を思いつく。もちろん，銅鏡なのであろう。その制作を石凝姥に命じたという（工人が女性であることにはぜひ注目しておかなくてはならない。私は縄文土器や，弥生土器についても，その工人たちは女性たちではなかったかと考えている）。その銅を制作する文脈の中で，『日本書紀』の一書には

「真名鹿（まなか）の皮を全剥ぎて,天羽鞴（あまのはぶき）に作る」とある。雄鹿の皮でつくるふいごはやはり羽をもった鳥のイメージだったことになる。

谷川氏はそこでマルセル・グラネが論じた中国の伝承を援用している。ただ,グラネがフイゴを連想させる鳥としたのは,谷川氏のいうような白鳥などではなく,ミミズク,あるいはフクロウである。梟（フクロウ）という漢字はまた曝し首をも意味することを考えると,白鳥のようなロマンティックな鳥のイメージではない。同じ鳥でもむしろ怪鳥を意味していよう。饕餮文（とうてつもん）の青銅器を見かけることがあるが,饕餮もまたフクロウをもととし,悪鳥である（7）。

谷川氏の説は詩人としての直観によるが,氏は精力的に日本各地をまわった方であり,それは他の民俗学者たちの追随を許さない。昨今の民俗学者たちはピンポイントでのフィールドワークに終始する傾向がありはしないか。鍛冶氏の集団のいたところには白鳥伝説があり,そこには物部の足跡があるという説は,谷川氏の丹念な実地踏査からの実感に裏付けられている。

また,ホムツワケが母の狭穂姫が兄の狭穂彦の下に走って夫の垂仁天皇に攻められ,火（ホ）の中で誕生したとする伝承はそのまま金属精錬の過程をなぞっているのであり,ことばがしゃべれなかったというのも,水銀中毒によって咽喉を犯されることの多かった鍛冶師たちの職業病を暗示しているのだと,谷川氏は指摘している。水銀中毒者を数多く出した水俣出身の谷川氏ゆえの「気づき」である。そしてさらに,鳥取氏の祖先の「天湯河板挙」の「湯」も折口信夫などのいう常世から流れ来る神聖な「水」をいうのではなく,鎔鉱炉から流れて来る溶解した金属をいうのだと,谷川氏はしている。鳥取氏は物部の中の物部であり,金属の武器生産者であるとともに,類なき戦闘者を出す氏族だったといえよう。その一族の蟠踞したのが,今の阪南市一帯であったことになる。

七　波汐神社とその祭礼

その鳥取郷の中心をなし,また鳥取氏の共同体を統べる役割を果たしていたのは波汐神社である。しかし,現在の波汐神社も神さびた森の中にあって古い由緒をうかがわせるものの,歴史の中で幾多の変遷を経て来ていて,昔のままのものではない。『大阪府全志 巻之五』は次のようにいう。

【波汐神社】

波汐神社は南方字池の内にあり,延喜式内の神社にして角凝命を主神とし,相殿に品陀別命を祀れり。鳥取郷の総社にして,鳥取氏の其の祖神を祀りしものならん。今の大字桑畑なる字奥の宮にありて鳥取大宮と称せしが,南北朝の戦に鳥取氏の南朝に加はりしが為め,天授年中山名氏に滅ぼされ,当社及び波太八幡宮並びに宮寺たる神光寺も総て劫火に罹りて焦土と化せり。

波多八幡宮は当時今の下荘村大字貝掛の指出森にありて，昔神功皇后の新羅より凱旋し給ひしとき，務古の水門より紀の國に至らんとして御船を鳥取の玉津浦に繫がれ，武内宿祢皇子を懐にして其の海辺を逍遥せし縁あるに依り，同皇子即ち品陀別命を其の地に祀りしものに係り，神光寺は貞観年中南都大安寺行教和尚の其の祖紀船守の墓に詣づる為め淡輪村に行かんとして，鳥取郷を過ぎけるとき，鳥取隼人正の一寺を創立して宮寺と為し，同和尚を開山たらしめたるものにて，宝塔・護摩堂・般若堂・東坊・西坊・普門院等鱗次檐を連ねたりしといふ。

鳥取氏已に亡び，当社及び波太八幡宮並に神光寺も烏有と化せしかば，郷の耆宿之を嘆じて，永徳年中其の三十六人力を戮せ私財を抛ち，地を南山の麓に卜して社殿を再建し，波太八幡宮の祭神を相殿に合祀し，神光寺を再建して，護摩堂・帳舎・僧坊等旧観に復せしは即ち当所なり。

然るに天正十三年豊臣秀吉の根来征伐に際し社頭再び兵火に罹りければ，御朱印地書類を初め平重盛奉納の太刀・梶原景時奉納の長刀，其の他の旧記什宝等悉く灰燼と化し，神領は没収せられて無禄となりしが，慶長四年豊臣秀頼は其の臣片桐東市正且元を奉行として社殿を造営し，神光寺は祀官を扶けて祭祀を勤め来りしも，明治維新後の神仏分離に依りて寺は廃絶し，社は同五年郷社に列し，同四十年一月神饌幣帛料供進社に指定せらる。

波汰神社本殿

この記事も少しわかりにくいところがあるのだが，波汰神社は主神を鳥取氏の祖神である角凝命として，今は品陀別命（応神天皇＝八幡神）を相殿に祀っている。もとは現在の場所ではなく，大字桑畑にあった。それが，南北朝の時代，鳥取氏が南朝方に加わったために，鳥取氏は滅ぼされるとともに，この原波汰神社＝鳥取大宮も焼滅した。品陀別命を祀る波汰八幡宮とその神宮寺である神光寺はまた別のところにあったのだが，やはり南北朝の乱によって焼滅した。そこで，永徳年中（1381 ～ 1384），土地の三十六人が私財をなげうって，波汰神社を現在の地に再建し，そこに波汰八幡宮の祭神であった品陀別王も相殿に合祀し，神光寺も再建した。ところが，これもまた，天正十三年（1585），豊臣秀吉の根来攻めの際にふたたび灰燼に帰し，現在のものは，慶長四年（1599），豊臣秀頼が片桐且元に命じて再々建したものだという。明治の廃仏毀釈によって神光寺は廃されたのが，今の波汰神社の姿になる。ただ，波汰神社を訪れる者を混乱させるのは，少し離れてはいるものの，同じ境内といって

いいところに，鳥取夷神社があることである。しかし，これは鳥取郷の各字々にあった神社を明治四十二年に集めて合祀したものであるらしい。

「波汰」という神社名は「わたつみ」の「わた」，つまり海なのであろう。朝鮮語でも海をパダといい，なぜかこの語は日本語と朝鮮語で共通である。海の部民を「わたのべ」といい，転化して「わたなべ（渡部，渡辺）」という姓になったことはいうまでもない。実は「波汰」が海であるには違いないと思いながら，そう断言することにはややためらいがあった。というのも，波汰神社に海へ繰り出す神事があるにしても，現在の波汰神社も，それから原波汰神社があったという桑原も海岸線からやや離れた２，３キロの位置にあるからである。しかし，この論考を執筆している 2021 年 3 月，東日本大震災から 10 年ということで，その津波の映像をふたたび見るに及んで，気づかされたことがある。あまり幸福な「気づき」だったとはいえないのだが，南大阪の海岸線は南海トラフが動くたびに大きな津波に何度も襲われているはずなのである。『方丈記』にも元暦二年（1185）の大地震と「海ハカタブキテ陸地ヲヒタセリ」という大津波の記述があり，『太平記』には康安三年（1361）の大地震と大津波の記載がある。「海は傾きて陸地に成しかば」という，引き潮，あるいは地殻の隆起が記され，阿波の話ではあるが，「中にも阿波の雪の湊と云浦には，俄に大山の如なる潮漲来て，在家一千七百余宇，悉く引潮に連て海底に沈しかば，家々に所有の僧俗・男女，牛馬・鶏犬，一も不残底の藻屑と成にけり」とある。阿波は南大阪の対岸といってもいい位置にある。あるいは，宝永四年（1707）には南海トラフの全域が破壊されて，大地震が起こり，東海，近畿，四国，九州の海岸部全域が津波に襲われ，このようなときに使うことばではないが，「津々浦々」が消滅したはずなのである。もうやめよう。波汰（海）神社も，それから次にあげる海会寺も，海にちなむ社寺がやや内陸部にあってよく，むしろあるべき位置にあるというべきなのであろう。

今回のこの論考は，実はこの波汰神社の祭礼を実見してルポルタージュを書くつもりで着手して，そのルポルタージュが大半を占めるはずのものであった。ところが，2020 年度はパンデミックの状況下，当然，祭礼は行われなかった。Youtube である程度は見ることができるものの，やはり実際に生で見て受ける印象はまったく違うものであろうし，この論考もまた違ったものになっただろうと思う。

『大阪府全志 巻之五』は，その波汰神社の祭礼について，次のように続けている。

祭祀は往時より木村（今は田島と改む）・山本両氏の掌る所にして，両氏共に鳥取氏の裔なり。今の氏地は本村・西鳥取村・尾崎村の全部及び下荘村の内大字貝掛にして，例祭は四月十五日・秋祭は十月十一日に行はるれども，以前は二月初午及び六月初午に大祭を行ひ，二月の初午には，大字貝掛の玉津浦に神輿の渡御ありて貝掛より甲冑せる武士の出迎ありしは，三韓征伐の古式に拠りしと伝へ，六月の初午には，氏子の各村は矢倉と称して御所車に屋根を付けたる車を曳出して参詣し，其の数四五十台の多きに及びしが，今は十月十一日の

大祭前日の宵宮に矢倉の宮入を為し，其の数は稍減じたるも尚二十台の余に出で，石田の血祭と呼ばれて非常に喧噪し，其の壮観を見んとて群集雑閙せる為め，地方の名物祭となりて其の名高し。

かつて二月初午の日に行われ，今は四月十五日に行われるという祭りは，波汰八幡宮の祭祀であったろう。海に神輿を繰り出し，赤子の八幡神，すなわち品陀別命を迎える意味合いをもっていたのだと考えられる。かつて六月初午に行われ，今は十月十一日に行われる大祭が波汰神宮，すなわち鳥取大宮そのもののお祭りであったと考えられる。その「矢倉」の宮入りが物見の人びとを集めてこの地方の名物祭なのだというが，映像を見ると，本殿の前の石段を，大勢の氏子が勢いをつけて引っ張って，豪壮で重いはずの「矢倉」を一気に引き上げる。かつてはそれが四五十台続き，この記事のころは二十台，素晴らしく威勢のいいお祭りであり，「血祭」といわれるほどだから，矢倉に圧迫されてなのか，雑踏に巻き込まれてなのか，怪我人の絶えない祭りであったらしい。今でもその面影は十分にとどめている。古代の鳥取郷の人びとの息吹きを伝えるお祭りだといえよう。

八　海会寺　仏を打ち欠く盗人，仏を供養する人びとの光景

その鳥取郷の人びとにも仏の教えが浸透してくる。愛欲の放埒をいましめ，ものを貪ることをいましめ，むやみに憤ることなく，生き物の命をいとおしむことを教える。次の『日本霊異記』に登場するお寺は「尽恵寺」とあるが，海会寺のことではないかとされる。天正五年，海会寺は織田信長に焼かれて残っていない。その跡が発掘されて史跡公園になっている。所在地は現在の地名で泉南市信達大苗代であり，『和名抄』の日根郡四郷の鳥取郷とはいえず，北隣の呼於郷になる。

海会寺址

仏の銅の像盗人に捕られて霊しき表を示し盗人を顕す縁　第二十二

和泉国日根郡の部内に，一の盗人有り。道路の辺に住み，姓名詳ならず。天年心曲り，殺と盗とを業とし，因果を信はず。常に寺の銅を盗み，帯を作り衒して売る。聖武天皇の御世に，其の郡の尽恵寺の仏の銅の像盗人に取らる。時に路往く人有り。寺の北の路より馬に乗りて往き，声有るを聞く。叫び哭きて曰はく「痛きかな。痛きかな」といふ。路ゆく人聞き

て思はく「諫めて打たしめずあらむ」とおもひて，馬を趍せて疾く前む。叫ぶ音に近くに随ひて，やうやく失せて叫ばず。馬を留めて聞けば，ただし鍛する音のみ有り。所以に馬を前めて過ぎ往けば，却くに随ひて先の如くまた呵び呻ふ。忍びて過ぐること得ず。故にまた還来る。叫ぶ音また止みて鍛する音有り。疑はくはもし人を殺すかと，かならず異ふ心有らむとうたがひて，良久にありて徘徊り，竊に従者を入らしめて屋の内を窺看しむれば，仏の銅の像を仰け奉りて手足を剔缺き錠を以ちて頸を歸く。すなはち捕へ打ちて問ひていはく「何れの寺の仏の像ぞ」といふ。答へていはく「尽恵寺の仏の像なり」といふ。使を遣りて問はしむれば，実に盗めるなり。使者語を挙げて具に状を述ぶ。僧並に檀越聞きて集り来り，破かれたる仏を衛みて号び愁へて曰さく「哀なるかな。悲しきかな。我が大師や。何の過失有せばか此の賊の難を蒙りたまふ。尊き像寺に有すときは像を以ちて師とす。今滅びたまふより後には，何を以ちてか師とせむ」とまうす。衆の僧轝を厳りて損はれたる仏を安置き，哭きて寺に殯りたてまつる。彼の盗人刑罰せられずして捨てらる。路ゆく人繋ぎて官に送り，囹圄に閉囚ふ。定めて知る，聖其の悪を輟めむとして是の瑞を示す，至誠懼るべし，聖の霊無きにあらざることを。涅槃経十二巻の文に仏の説きたまふが如し「我が心に大乗を重ぶ。婆羅門の方等を誹謗るを聞きて其の命根を断つ。是の因縁を以ちて是れより以来地獄に堕ちず」と。また彼の経の三十三巻に云はく「一闡提の輩は，永く断滅つが故に，是の義を以ちての故に，蟻子を殺害すらなほ殺の罪を得れども一闡提を殺すは殺す罪有ること無し」とのたまふは，其れ斯れを謂ふなり（此の人は仏と法と僧とを誹謗り，衆生の為に法を説かず，思議無きが故に，殺すとも罪無きなり）。

「姓名詳ならず」とここではいうが，端的にいって，この盗人は鳥取氏であり，そうでなくてもその周辺の人間といっていいだろうと，私は思う。寺の所有する銅器を奪っては，鍛金し，あるいは熔解して，帯状にして売りさばいていたというのである。道行く人が聞くと，遠くからは「痛きかな，痛きかな」と聞こえるが，近づくと「鍛する音」ばかりが聞こえる。遠ざかるとまた苦しみ叫ぶ声が聞こえ，また近づいて行くと鍛冶をする音になる。そこで裏に回って従者に見させると，仏の銅の像を鏨で掻き砕いていたという。つまり盗人は金属の精錬，鍛冶に習熟していたことになる。仏の教えになじむことなく，仏の像に価値を認めず，畏怖することもない鳥取の男には仏の声が聞こえず，自分の鍛冶の工房で鍛冶師の技術でもって銅の製品に過ぎないものを加工して，そして売りさばいているということになる。「路往く人」は馬に乗っていて，そして「使者」をやって偵察させ，そして捕らえさせる，とすれば，日根郡の郡司階級とも考えられるが，その処置は官吏らしくもない。盗人を捕らえて打擲してどこの寺から盗んだか白状させ，尽恵寺に使者をやると，僧および檀越が駆けつけて，泣き叫んで，飾り立てた輿に砕かれた仏を安置して寺に運んで殯を行ったという。まるで生きていた人のように仏の像を扱い，葬儀を行ったということになる。まことに素朴な信仰のありようといわなくてはならない。そして，盗人については刑罰を行わず，放置されたと書く。

仏者たちは制裁を行うべきではなく，まして殺生などはすべきではないと，尽恵寺の僧侶も檀越も考えたということをいいたいのだろう。これも真っ正直に仏の教えを守ったものだが，ただ，『日本霊異記』の著者の景戒は，仏者は蟻を殺してはいけないけれど，こんな謗法の盗人は殺してもいいのだと，やけに激しいことばを投げかけている。仏教が導入されてしばらく後の，鳥取郷近辺の光景である。盗人も檀越も鳥取氏なのではないか。

九　自然居士のこと

旧鳥取郷の中には自然田という地名があり，波汰神社にも近接している。「自然」ということばで思い出すのは，柳父章先生の名著『翻訳語成立事情』（岩波新書）であるが，そこでは仏教由来の古い「自然」ということばに，西洋の nature の意味を盛り込んだために，混乱が生じていると説かれている。「自然田」という地名は，勝手次第の土地，免租の権利をもつ土地とでもいうことになろうか。ただし，豊臣秀吉の時代からは検地が行われ，すでにそのような特権はなくなっている。「前田」というのは，ただ単に家の前にある田ではなく，神社の前にあって，神々に奉納する米を収穫するための田であるというのは，谷川健一氏の卓説であるが，「自然田」というのは波汰神社の前田だと考えることができるのではないだろうか。

その自然田に実は自然居士の旧宅址というのがある。ただ「自然」ということばからの，いつの時代かの好事家の故事つけだと切り捨ててもいいのだが，鳥取郷を実際に歩いてみると，そう簡単な問題でもない気がしてくる。自然居士その人は鎌倉末期の京都に実在した人物だとされる。『天狗草紙』の絵を見ると，桟敷の上で，有髪で烏帽子をかぶり，髭を生やした男が，ササラをもって舞い踊っていて，それが自然居士だとされている。「居士」を名乗るから，僧ではないが，京都で活躍した唱導の芸能者であり，「自然法爾」などという深遠な仏教哲学を踏まえたものというのではなく，当世の喜怒哀楽をあるがままに受け入れて肯定し，したたかに生きた風狂の演芸者であり，また京都の人気者だったのだと思われる。鳥取郷の中には波汰神社を挟む形で，自然田とは反対の方向に舞という地名があり，それは説経・祭文・万歳・歌舞など芸能に従事する人々が居住したことに由来するという（『大阪府の地名Ⅱ　日本歴史地名大系28　平凡社）。和泉市にも舞の地名があるが，それも同じく芸能者が多く居住していたことによる。自然居士が自然田の出ではないにしても，この地方の出自であるとかこつけたくなるような材料が確かにないわけではない。

自然居士旧居址伝承地

観阿弥は髭を生やした中年の自然居士を美少年の喝色の姿に変えた。そして，身売りをし

た少女とそれを東国に連れ去ろうとする人買いを大津まで追いかけて , 少女を連れ戻そうと人買いと掛け合い問答をする , 仁慈と正義に満ち , かつ理知的な姿に変貌させている。そしてその舞う姿も , 室町将軍の趣味にかなって , あくまでも優美である。しかし , その中にあっても , 中世社会のレジームからはみ出して生きる芸能者のしたたかな姿は決して失われていないように思われる。

【この論考は本学共同研究プロジェクト 17 連 260「大学教育における南近畿の地域文化資源の掘り起こし・保存・活用の研究」の研究助成を受けた成果の一部である】

【注釈および参考文献】

（1）安井良三「物部氏と仏教」（『日本書紀研究』第三冊　1968 年 11 月　塙書房）
（2）J.C. マクローリン著･澤崎坦訳『イヌ』（同時代ライブラリー 59　1991 年 2 月 岩波書店）
（3）桃崎有一郎『武士の起源を解きあかす―混血する古代 , 創発される中世』（ちくま新書 2018）
（4）大江健三郎『あいまいな日本の私』（1995 年 1 月　岩波新書）
（5）谷川健一『谷川健一全集 第 1 巻 古代 1 白鳥伝説』（2006 年 5 月　富山房インターナショナル）
（6）『谷川健一全集 第 21 巻 古代・人物補遺 四天王寺の鷹 人物論』（2011 年 3 月　富山房インターナショナル）
（7）Marcel Granet “ Danses et légendes de la Chine ancienne”（1994 年 1 月　Presse Universitaire de France）
※なお , 引用は次の書物による。
・『日本書紀 上・下』（日本古典文学大系 67,68　1967 年 3 月 ,1965 年 5 月　岩波書店）
・『新訂増補 国史大系 7 古事記・先代旧事本紀・神道五部書』（1966 年 1 月 吉川弘文館）
・『日本霊異記』（新古典文学大系 30　1996 年 12 月　岩波書店）
・井上正雄『大阪府全志巻之五』（1922 年 1976 年復刻 清文堂出版）
・『方丈記・徒然草』（新古典文学大系 39　1989 年 1 月　岩波書店）
・『太平記 三』（日本古典文学大系 36　1962 年 10 月　岩波書店）

（2021 年 3 月 25 日受理）

Southern Osaka: The Cradle of the Japanese Buddhism (5)

UMEYAMA　Hideyuki

After the defeat of the Shintoists in the war between Buddhists and Shintoists in the year 587CE, the Mononobe (物部) clan was destined to run its course to ruin. But what was the Mononobe clan? The word mononofu, synonym for samurai, was derived from the name of this clan. So, we can easily assume that Mononobe was a representative clan of ancient warriors. Furthermore, it also means that this clan shouldered the military industry, and as a result, the majority of other industry of that period.

According to the myths, Nighihayahi, ancestor god of the Mononobe clan, came to Japan, ahead of Ninighi, ancestor god of the Emperor's family. Transferring the political power to the Emperor's family, Mononobe had maintained a certain important position within the Emperor's government. We will search for and consider the Mononobe legends and their legendary places which still remain in present day Osaka.

In Nihon-shoki(日本書紀), we find an impressive tale of Mononobe's vassal Tottori-no-yorozu (鳥取万), who valiantly fought to the death in the above religious war and of his faithful dog who continued to protect his master's corpse. We visit the legendary tombs of the dog and of his master. Tottori is also the place name of the extreme South Osaka. Hata-jinnja(波汰神社)exists as the religious centre of this district and observes the ancient rites and festivals. The remains of Kaieji (海会寺), a few kilometres from Hata-jinja, shows us the Tottori people's reformation to Buddhism. In Nihon-ryoiki (日本霊異記), we can find an interesting episode which tells of the Tottori people's spiritual beliefs at that time.